

地図帳の活用③ 「日本」編

元全国中学校社会科教育研究会会長 赤坂寅夫

その一 同縮尺の地図をつなげる

トラの巻⑬において、「同縮尺の地図を並べてみよう」と紹介しました。これは日本についても同様です。同縮尺の地図は、つなげたり比べたりするなどいろいろな活用が考えられます。

まず地図をつなげる活動に取り組んでみましょう。400万分の1の地図である『中学校社会科地図』（以下、地図帳）p.75～77「①日本列島―南西諸島―」とp.78～80「①日本列島」の地図を重ねてみましょう（図1）。4人1組のグループで四つの机を田の字型につけて二つの地図を重ねて眺めてみます。

重ねて眺めることで、一つの地図帳で見るとよりも迫力が生まれ、我が国は周囲を海に囲まれた南北に長い島国であることが実感できるでしょう。そして約38万km²という我が国の国土面積が世界の上位3分の1に入ることを理解が深まるのではないのでしょうか。地図には、尖閣

諸島、竹島、国後島の写真がそれぞれの島の近くに掲載されています。それぞれの島の位置を地図上で確認し、いずれの島も我が国固有の領土であることに触れましょう。しかしここでは領土問題に深入りせず、関心意欲の喚起にとどめます。続いて距離感を実感するために、那覇・タイペイ間、北九州・プサン間、那覇・東京間、東京・青森間の直線距離をものさしやテープを利用して比較しましょう。縮尺の小さい地図で同様の作業を行うより距離感を実感できると思います。つなげた日本列島の地形の段彩の色と隣国の韓国や中国のシヤンハイ周辺の色との比較で、日本は濃い茶色が多く山がちであることや、日本の主要河川の河口と中国の長江河口の

図1 『中学校社会科地図』
p.75～77（下）と
同p.78～80（上）



大きさを比較することにより、我が国の地形の特色を読み取ることができます。つなげた地図を使ってグループで多様な読み取りをしてみましょう。

ポイント①



地図をつなげることで、迫力と実感をもたせる

その二 同縮尺の地図を比べる

地図帳p.76～77「⑥大隅諸島」, 「⑦大島（奄美大島）」, p.82「②対馬」, 「③五島列島」はいずれも100万分の1でp.81～82の九州地方の地図と同縮尺となっています。隣席の生徒どうしで島々と鹿児島県、長崎県の他地域との面積を比較したり、港や空港の地図記号や航路などから結びつきを読み取ったりしましょう。

同様に、50万分の1の地図であるp.77「⑧沖縄島」, p.83～84「①九州地方北部」を並べることで沖縄島の南北の広がりやアメリカ軍用地が沖縄島に広く分布していることを確認することができます。50万分の1の地図はほかにもp.95～96「①大阪府とそのまわり」, p.107～108「①愛知県とそのまわり」, p.117～118「①東京都とそのまわり」などがあります。三大都市圏として、黄色で示されている市街地の広がり・大きさや、周辺の衛星都市とのつながりなど、並べて比較・大観することで大都市圏としての地域の特徴をとらえることができます。

同縮尺の地図をつなげたり、並べて比較したりすることにより、1枚の地図だけよりも多様な見方や読み取りができることが理解されると思います。次期学習指導要領では、「見方・考え方」を働かせた学習活動が求められています。私たち社会科教師には、生徒の見方・考え方を広め深める教材提示のより一層の工夫が必要とされています。

ポイント②



同縮尺の地図をつなげる・比べることで、見方・考え方を広め深める

その三 地図帳の凡例に着目する

帝国書院の地図帳では、400万分の1の地図では土地の高低で色分けをし（等高段彩）、100万分の1と50万分の1の地図では、等高段彩と田・畑・果樹園・市街地など土地の使われ方で色分けする「土地利用」表現をあわせて用いています（図2）。

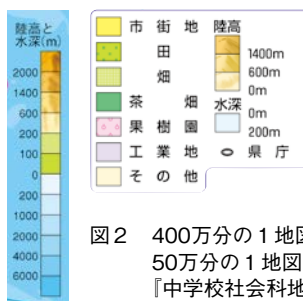


図2 400万分の1地図の凡例（左）、50万分の1地図の凡例（右）『中学校社会科地図』より

日本地図の等高段彩では、600mと1400mの等高線が採用されています。これに2000mの等高線も加えて、高さを4段階（0m～600m未満、600m以上～1400m未満、1400m以上～2000m未満、2000m以上）で大まかにとらえられるようになっています。

これには次のような理由があります。日本で最も標高が高い人口10万以上の都市は松本市で、その標高は610m（気象庁のアメダスの標高）です。つまり、600mの等高線には、これより低いところに人口やさまざまな産業が多くみられるという意味がこめられています。

一方、標高600～1400mの地域では、都市はあまり多くみられないものの、畑作や果樹栽培などの農業や林業などが営まれており、人々が生活しています。しかし、標高1400mをこえると山林が多くなり、産業がほとんどみられなくなります。1400mの等高線にはこうした意味が

あるのです。

土地利用表現の地図を利用すると、100万分の1や50万分の1の地図では田と畑の違い、市街地と工業地域の広がりなどが判別でき、農産物の絵記号からその地域の主要な作物を読み取り、人々の暮らしや産業のようすなど地域の特色をとらえることができます。教科書の本文に示された地理的事象について、地図で場所や分布・広がりを読み取り、なぜその作物がその地域で栽培されているのか、周辺の地形、河川の流れ、鉄道・道路等との関連から考えるといった地理の見方・考え方を育成する活動ができます。例えば、『社会科 中学生の地理』（以下、教科書）p.218～219の高原野菜や果樹栽培について、地図帳p.105～106で絵記号や畑・果樹園の広がりを読み取り、標高や地形・気候などの自然条件、鉄道・道路や大都市との距離などの社会条件と関連づけて考える活動が可能です。教科書本文に示された事象について地図を使ってその根拠を確かめ、背景を考えることが地理学習の基本として大切です。

また、100万分の1や50万分の1の地図には、合併した旧市町村名を含め、多くの地名が掲載されています。地名があるということは、その場所に人が住み生活の営みがあるという証です。我が国は世界でも人口密度が高く、国土のすみずみまで人々が生活を営んでいます。地名の背景にある人々の営みをイメージしながら地名を読み取ってください。

ポイント③



凡例から人々の暮らしや産業のようすをとらえること

その四 歴史的事象を地図から考える

地図帳p.103～104「①本州中央部」（図3）には、地形の凹凸がわかりやすく表現されてお

り、都道府県境の多くが山地・山脈の尾根づたいになっていることや、現在の都道府県境と1868（明治元）年当時の旧国界と重なる部分が多いことが読み取れます。また、江戸時代の五街道や主要街道が、現在の主要な鉄道・道路のルートと重なる部分が多いことも読み取れます。江戸時代の参勤交代により現在の主要道路のもととなる街道が整備されたのです。これらの読み取りをおもな地名を読み上げつつ指でなぞりながら行ってみましょう。交通をポイントとして読み取る際は、江戸時代の航路にも着目させ、陸上交通のみならず海上交通の重要性にも気づかせたいものです。

旧国名にも着目し、例えば上総・下総、上野・下野、越前・越中・越後の上下や前後は京都を中心とした見方だということや、濃尾平野のようにかつての旧国名をもとにした地名が残っていることにも気づかせましょう。

地図帳には随所に歴史地名などが示されており、歴史的分野の学習にあわせて活用することが大切です。学習指導要領解説において「歴史的事象の指導に当たっては、地図の活用には十分留意して、歴史の舞台という視点から地理的な事柄とのかかわりに配慮したり、地理的条件に着目して取り扱ったりすることが大切である」と示されています。歴史的事象を考える場合、なぜここで？と地理的条件にも着目して考えることが多面的・多角的考察につながります。

ポイント④



地図を通して、その時代の景観をイメージすること

その五 主題図で地域の変化を読む

地図帳p.86「⑦北九州工業地帯の変化」（図4）の1960（昭和35）年と2014（平成26）年の二つの図を比較して読み取ってみましょう。地域の



図3 『中学校社会科地図』 p.103~104 「①本州中央部」

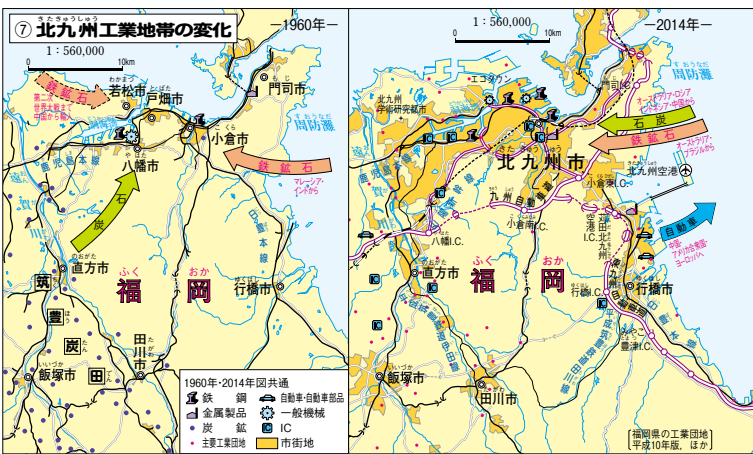


図4 『中学校社会科地図』 p.86 「①北九州工業地帯の変化」

資源を生かした工業の発達とその変化として、筑豊炭田から発達した北九州工業地帯の鉄鋼業と近年のICや自動車工業への変化を、教科書p.177の本文を読みながらとらえていきましょう。また地図帳p.86「⑨シラス台地の開発」の1963（昭和38）年と2013（平成25）年の二つの図からは、教科書p.174~175の本文の根拠として地域の変化や現在のようすが読み取れます。地理的分野の学習として、地域の変化を読み取ることも地理的見方の一つとして重要です。地図帳p.113「③諏訪湖周辺の工業地域」、 「④甲府盆地の果樹栽培」は、それぞれ教科書p.219「製糸業から電気機械工業へ」、教科書p.218「養蚕から果樹栽培へ」の本文と照らし合わせながら、地域の産業の変化を読み取りましょう。

ここで大事なのは、変化だけを読み取って終わりにしないことです。変化には要因が存在します。なぜ変化したのか、その背景と要因を考えることが地理的考え方として重要です。要因には、地理的条件のほかに歴史的背景も考えられます。新旧の地図の間には、社会や生活の変化があります。新旧の地図に示された地理的事象の変容から社会の変化・生活の変化を読み取ることが深い学びにつながるのです。持続可能な発展として今後の地域の在り方を考えることが次期学習指導要領で求められており、地域の変化を地図から読み取り、変化の要因をふまえて地域の課題を見だし今後

の地域の在り方を構想することが、これからの地理学習として重要な活動です。

地域の変化を地図から読み取る活動の際には、「トラの巻⑨」（2015年度3学期号）でも示したように、明治・大正・昭和の戦前・戦後の地形図を活用すると、産業の変遷や市街地の拡大を読み取りやすいことがあります。地域によっては古い地形図も活用して地域の変遷をよりリアルに読み取る工夫をしてみてください。

ポイント⑥



主題図の地理的事象の変化からその要因を探ること

※統計資料やグラフの活用については、「トラの巻⑥」『地理的技術の基礎・基本③-統計資料・主題図の読み取り-』（2014年度3学期号）を参考にいただければ幸いです。